（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　リン ジン イェンジン

五章構成の本論文は、特定の文化的カテゴリに固有と見なされる性質（帰属的性質）を持つ芸術作品が、その性質ゆえに価値を付与されるパターンを論じ、その文化論的考察を「芸術の定義」という基礎理論へ繋ぐ論理を構築した試みである。

第一章では、帰属的性質から生ずるエキゾチックさ、革新性などの性質が相対的客観性をもって享受されることが、観光者と居住者の対比によって論じられる。広義の美的経験である「食事経験」を素材に、個人および集団の心理的バイアスに関する知見をふまえつつ、認知的性質としての帰属的性質が美的性質を体系的に誘発する経緯が明らかにされた。

文化的盗用を論じる第二章、芸術作品の真正性と道徳性を扱う第三章では、制作者と鑑賞者の文化的アイデンティティが主題となる。文化の内部者・外部者が判別され、マジョリティとマイノリティの権力関係が前景化する諸文脈が、作品の価値判断をいかに左右するかが論じられ、ここでも相対的客観性を有する判断が可能であることが論証される。

第三章までの「文化的カテゴリ」の考察を「芸術カテゴリ」へ応用したのが第四章と第五章である。芸術の制度と機能をめぐる 1960 年代以降の諸理論を批判的に吟味しながら、芸術と非芸術との関係、狭義の芸術（西洋のアカデミズム芸術）と広義の芸術（美的実践一般）との関係が精査される。広義の芸術として、コンセプチュアル・ファッション、分子料理、前衛いけばなを俎上に載せ、文化的盗用におけるマジョリティとマイノリティの力関係と同型の関係が、狭義の芸術と広義の芸術の間に成り立つ仕組みが粗描された。カテゴリの属性と個別事例の属性を混同する錯誤への警鐘にまで踏み込んだ本論文後半は、社会文化論が芸術一般理論の洞察を導いた模範的な達成と言える。

差別や搾取をはらむ芸術倫理上の問題に対し実践的示唆を与えることを出発点とした本論文は、異なるカテゴリの類似性を論ずるさい、両項の力関係に基づいてハイブリッド、流用・盗用、同化に分類しつつ、生物進化論の概念を援用するなど、分析手法に創意工夫が多々見られた。芸術をめぐる社会心理と倫理の問題を、芸術定義の抽象理論へ敷衍する構成も、芸術哲学全般への確かな貢献であると評価できる。

以上、方法面、理論面、実践面のすべてにおいて有意義な成果を打ち出した本論文ではあるが、些少の不足も指摘された。「相対的客観性」「集団基準」といった枢要概念の特徴づけがやや曖昧であること、西洋芸術を頂点とする文化ヒエラルキーのモデルが素朴すぎるようにも感じられること、倫理的争点解決への具体的提案をあえて控えていること等である。とはいえ、芸術の文化的課題と基礎理論を統一的に分析する本論文の目的に照らすと、それらの単純化こそが論述の純度を高め、説得力を増したとも言える。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。